

Kawasaki 美術館
金山平三の世界



《夕映え》 1945-56 (昭和20-31) 年 50.0×60.0cm 油彩・布 川崎重工工業株式会社蔵

人々の営みと自然の循環、
その響き合いに画家が共感

通りに面した家々の、傾斜のきつい屋根から下ろされた雪が、その通りの脇に高く積もっている。通りには頭まですっぽりと着込んだ子どもたちが、陽の沈む方へ向かって歩いたりしていている。金山の作品の題名には、地名を明らかにしたものと、その情景を詩的なことばで表現したものがあり、本作品は後者のため、具体的な地名は不明である。しかしよく似た主題の作品をいくつも遺していることから、これが山形は大石田の情景で、また積もった雪の嵩の具合から、おそらく晩冬の情景であろうことがともに推測される。

さて、金山が大石田を拠点にした理由としては、「一寸外国に来ているように思はれます」と自身で記した特徴ある家並みのほかにも、ここに住む人々に魅せられたことが挙げられよう。戦前からの富裕な町の人々は文化・芸術に造詣深く、画家金山を温かく迎え入れた。金山もそれに応えるようにこの街に住まい、子どもたちに踊りを教えるなど交流を深めた。ここでの夕映えに家路を急ぐかのような子どもたちの描写は、人々の営みと自然の循環との響き合いに対する画家の共感にほかならない。

(兵庫県立美術館学芸員
相良周作)

金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。

